

Movie Review 14 #女は二度決断する

『#女は二度決断する』(2017年)をamazon prime videoで再視聴した。ファティ・アキン監督作品。第70回カンヌ国際映画祭で、主演女優賞を獲得した。最後の場面に来て、以前に観た記憶が蘇った。監督は移民の二世。『愛より強く』でベルリン国際映画祭金熊賞を受賞。

クルド系移民のNは麻薬取引で懲役刑に処されたが、刑務所で経営を学び、出所後は旅行代理店を経営し、ドイツ人の妻Cと結婚した。Cは6歳の息子をNの事務所に預けてゆくが事務所に戻ると、何者かに爆破されていた。DNA鑑定で、現場で発見された身元不明の遺体がNと息子のものであると告げられた。Cは、当日、事務所の前に大きな荷台のついた真新しい自転車を停めた女性に「自転車を盗まれないよう気を付けて」と声をかけたことを思い出し、それを警察に告げる。しかし警察は信用してくれない。友人の弁護士がCの相談に乗り、すっかり落ち込んだ彼女に同情してコカインを渡すが、服用後に警察がNの周辺を探るための家宅捜索に入り、コカインを使っていたことが見つかり、事情聴取を受ける。義母に責められ絶望した彼女はコカインを服用し、手首を切って自殺しようとする。そこに警察から、ネオナチ組織を運営する若い夫婦を爆破テロ犯として逮捕したという電話がかかって来た。

Cは被害者遺族として、容疑者であるAとEの夫妻に対する裁判に立ち会うことを決める。原告側の証人として出廷したAの父は、息子がガレージに釘、肥料、燃料など爆弾の材料をため込んでいたことを証言した。弁護側は、ガレージのカギの隠し方などの不備を指摘し、第三者が勝手にガレージに入って爆弾を作ったことが否定できなくなる。次の証人である刑事はガレージにあった爆弾材料とテロ現場の発見物が一致すること、夫妻の指紋以外にもう一人の指紋が見つかることを証言する。弁護側は、身元不明の指紋は買った店の店員のものではなく「真犯人」のものである可能性を指摘する。被告側の証人であるギリシャのホテル経営者Mは犯行当日に夫妻がギリシャにいたことを証言するが、原告側はMがギリシャの極右政党のメンバーであった。Cが証言台に立ち、爆破前に見た自転車の女とEが同一人物だと主張したところ、弁護側はCのコカイン使用歴を挙げ、最近まで薬物を使用していたCの証言には全く信ぴょう性がないと主張。原告側は薬物テストを拒否する。裁判官は、最終的に夫妻の無罪という判決を下す。

裁判後、夫妻は海辺での休暇中の勝ち誇ったような写真をSNSに上げる。Mの経

営するギリシャのホテルにいたと思ったCは、ギリシャに向かう。Cはホテルを見張り、Mが海辺の松林のキャンピングカーにいる夫妻に荷物を運んでいるところを目撃する。Cはホームセンターへ向かい裁判で聞いたのと同じような爆弾の材料を買い、ホテルに戻って釘爆弾を作り、キャンピングカーの下に仕掛けるが、見張っているうちに葛藤が起こり、爆弾を回収して引き上げる。スマートフォンに残っていた、Nや息子と海へ行った時の動画を見ながらCは復讐すべきか上告すべきかしばらく考える。翌朝、Cは爆弾を持って松林に向かう。Cの二度目の決断はどういうものだったのか。

このころドイツ各地でトルコ人移民に対する連続殺人や爆弾テロをネオナチ組織の事件を行っていた。しかし、ドイツのトルコ人社会を治安悪化の主犯として責める報道が相次いでいた。監督は「人は暴力では変わることができないが対話などで変わることにはできる」ということを確信しで本作を作ったという。人は変わりうる、ということを感じることができるか、それとも暴力による復讐に進むかがテーマになっている。

ドイツの爆弾テロの歴史を見ると、1970年代には「ドイツ赤軍派（RAF）」が活動し、フランクフルトの米軍兵舎への爆弾テロや、経済界の要人を標的とした事件を引き起こしている。また、1972年のミュンヘン・オリンピックでは「黒い9月」という武装組織がイスラエル選手団を襲撃し、多くの犠牲者を出した。2016年にISIL（イスラム国）関連のテロが発生し、列車内での襲撃やクリスマスマーケットへのトラック突入事件が起こっている。さらに、極右過激主義思想に基づくテロも増加しており、外国人やユダヤ人を標的とした事件が報告されている。